

図書紹介

◎アジアにおける森林の消失と保全（井上 真編・財団法人地球環境戦略研究機関監修 中央法規 324頁 2003 2,800円）

FAO・UNEPなど国際機関、マスコミ、NGO、森林研究者、そして森林官などが、それぞれの立場・視点から東南アジアの森林消失の現状・保全の方策を述べた類書はたくさんある。しかし、現実にはそれらたくさんの有益な提言によっても、事態は改善されなかった。それだけ問題が複雑だということであろう。

本書はアジア（東南アジアと極東ロシア）を主対象に、地球環境戦略研究機関（IGES）の第一期森林保全プロジェクトの研究成果と継続の第二期プロジェクトの途中までの成果から、これら地域の森林保全策を、地域住民の視座から、フィールド研究の成果から、そして日本とアジア諸国の関係重視の立場から解析しながら、森林管理への住民参加を今後の森林政策の柱と位置づけ、この地域の森林管理策をあらためて提言したものである。

第Ⅰ部「問題の構造」では森林資源の現状と消失、NGOイニシアチブ、日本の政策、第Ⅱ部「地域住民の論理と外部アクターの論理」ではインドネシア、フィリピン、極東ロシア、メコン流域などでのフィールド調査結果、第Ⅲ部「森林政策の重点課題」では違法伐採、森林火災、アブラヤシ園拡大、保護地域・国立公園の森林管理と地域社会、そして第Ⅳ部「解決への模索」では国際条約での森林管理の方向、森林認証制度、森林管理への地域住民参加の重要性と展望などを22名のいわゆるベテランと大学院生クラスの若手が分担執筆している。

フォレスターズ・シンドローム（森林官症候群＝樹木を愛し人々を嫌う性向）を脱し地域住民の視座からの森林管理・参加型森林管理への移行は現実をふまえて説得力はあるが、大きな反省点はあるにしてもフォレスターの視点を排除し、対立させてもいけないであろう。若い方々によるフィールド研究が山村社会の現実を伝え、フィールド研究の楽しさ・苦勞が伝わり引き込まれるが、ローカルな視点・提言がかならずしも、グローバルは視点あるいは研究の目的に合致していないところもある。これもそれぞれの地域・村落で事情は異なり、その村落発展・森林との関わりもさまざまであることによろう。

多岐にわたる森林保全の問題を、グローバルな視点から大きく捉え、その解決策を住民参加の視点から提言しようという意図はよく理解できる。戦略的な政策研究の成果は別途公表予定とされているが、発展途上国での森林消失・その保全に無力感が漂うとき、本書の提言により勇気づけられるものがある。読み応えのある一冊である。

（渡辺弘之）